

# 明、清時代の煎茶道具紹介

諏訪

サンリツ 服部美術館 初公開含む所蔵品企画展



初公開を含めた中国の明、清時代などの煎茶道具を紹介している会場

諏訪市湖岸通り2のサンリツ服部美術館は、企画展「道具と飾りにみる 煎茶のたのしみ」を同館で開催している。中国の明、清時代などの湯飲み茶わんや急須、火をおこすための涼炉といった多彩な道具などの所蔵品約60点を並べた。中国からもたらされ、幕末から明治時代中期にかけて盛り上がりを見せた煎茶文化を紹介している。7月21日まで。

(手塚洋一)

同館によると、明、清時代の中国では文人と呼ばれる知識人の間で煎茶が流行。日本でも江戸時代初期ごろに煎茶が先進的な外来文化として迎えられ、その後、中国の文人に憧れを抱く教養を持った人々が愛好するようになった。大規模な茶会が開かれ、料亭や船上など複数の会場に茶席が設けられたという。

展示した道具のうち、「茗碗」は内側が白い湯飲み茶わんで、茶の色も染しめるようになっている。茶葉を入れる容器の「錫樽(しやくそん)形茶心壺」は、スズを材料に使うことで容器の色が徐々に変化する様子も味わったという。初公開の14点もあり、急須の「紫泥茶銚」は小ぶりでふっくらした丸みのある形と、滑らかなで光沢のある表面が特徴だ。

このほか、数千人が参加したという煎茶会の図録も展示し、茶席だけでなく道具や美術品などを飾る部屋もしつらえたことを伝えている。学芸員の藤生明日美さん(38)は「煎茶を飲みながら中国の陶磁器などを鑑賞する文化があったことを知ってほしい」と話している。

開館時間は午前9時半～午後4時半。休館日は祝日を除く月曜日。入館料は大人100円、小中学生400円。問い合わせは同館(電話066・57・3311)へ。